

Strix 11 : 253-261 (1992)

## カラ類のいない島、長崎大島の鳥相

上田恵介<sup>1</sup>

## はじめに

長崎県下の鳥類については、佐世保（鴨川 1974）や北松浦半島（鴨川 1979）、平戸島（鴨川 1970）などの鳥相がこれまでに明らかにされている。しかし大島の鳥については、これまでまとまった調査結果は公表されていない。今回、著者は大島町教育委員会の依頼で、大島の鳥類相を明らかにするために、1990年に3回、大島をおとずれ、調査を行なった。その結果、大島の鳥類相についていくつかの知見が得られたので、ここに報告する。

## 調査地および調査方法

長崎大島は佐世保湾の入口、西彼杵半島の北西の東経129.37°、北緯33.1°に位置する東西4.75km、南北4.75km、面積13.51km<sup>2</sup>の島である（図1）。現在、島の総面積1,351haのうち、山林が632ha、原野が150ha、田畑が205ha、宅地が67haをしめている。

調査は1990年3月13、14日、同5月10、11日、同11月15、16日の3回、計6日間行なった。調査方法は一地点に一定時間とどまり、その周囲に出現する鳥類を記録する定点観察と、一定のコースを決め、そのコースを平均時速2kmで歩き、両側25m以内（と上空）に出現した鳥を記録するラインセンサス法をもちいた。

定点調査は百合が岳、吹切、間瀬、大釜、蛤の浜、田浦、長谷川ダム、大島漁港、寺島（屋敷鼻と大浦）の合計10地点で実施した。調査した10か所の定点の環境は次のとおりである。百合が岳は島の最高点で、山頂付近にはタブやシイの林が残り、エノキ、クロキなどの樹種も多い。しかし頂上には展望台がつくられ、ひらけている。ここから種々の鳥を観察することができた。吹切は大島で唯一、湿地らしい環境である。海岸に近い沼地の半分以上はガマにおおわれ、開水面は少ない。湿地にそって東側に道が走り、畑や竹藪がある。間瀬は百合が岳の西側に位置する市街地にある污水处理場下の池の周囲の環境である。池の一方は急な斜面、一方は人家が接している。大釜は海岸の岩礁地帯で、斜面にはタブ、シイ、ヤマモモなどが多い。蛤の浜は内湾に面している浜で、潮が引くと100mくらい砂地があらわれる。川が流れこむ水門の内側は干潟状の環境となっている。田浦は道路で隔てられた湾の奥が干潟状の湿地となっており、両側に山が接しているため、独特の景観を形づくっている。湿地の奥にはヨシ原も発達している。長谷川ダムは両側を山に囲まれ、人のおとずれはめったにない静かな環境である。このことが鳥にとってよい生息場所となっているようである。大島漁港は防波堤の外側が岩礁となっているが、港の周囲は潮が引くと干潟があらわれる。また道路に隔てられた内側にはヨシ原も発達している。寺島（屋敷

1992年10月26日受理

1. 〒171 東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学・一般教育・生物学研究室

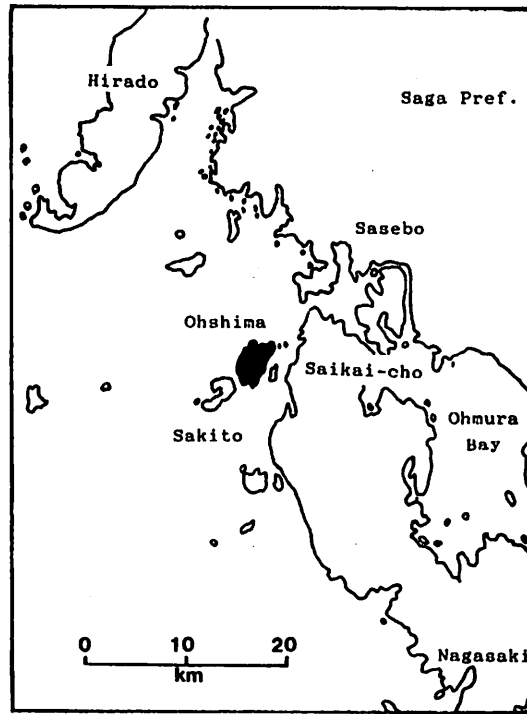


図1. 長崎大島の位置.

Fig. 1. A map of Ohshima and the neighbouring areas in Kyushu district.

鼻)は海岸に近く、人家、畑が点在する環境である。海岸は磯になっている。寺島(大浦)は海岸からちょっと山側に入ったところの谷津田状の湿地である。谷の一方は雑木林、一方の斜面には農家が並んでいる。

ラインセンサスは1)馬垣跡~太田尾(1.4km)、2)横尾峠~田浦~塩田漁港(1.2km)、3)内浦~大島(2.1km)の3本のコース(全長4.7km)を設定して行なった。馬垣跡~太田尾コースは、小高い山の頂きから海岸の太田尾集落にいたる段々畑を主とした環境である。道の海側の斜面にはヤツデやシイの林も点在するが、おもにチガヤとススキの茂みが多いひらけた環境である。横尾峠~塩田漁港コースは、横尾峠から海岸まで降りていく舗装道路で、両側をシイ・カンシを主体にする林にはさまれている。シイ・カン類以外の樹種はクス、エノキ、トベラ、アオモジ、ヤマモモなどで、ところどころに竹藪やサクラの並木があり、急斜面はシダ類に覆われている。また切りどおしや畑も点在する。内浦~大島コースは内湾にそった海岸の道からはじまり、沢をのぼって峠を越え、島を横断するコースである。道の両側の環境は変化に富み、海岸、竹藪、クス、ヤマモモ、シイなどの原植生に近い林、ヒノキ・スギ林などを含んでいる。

センサスデータは各月、各コースで記録された種数、密度(1haあたりの記録個体数)、多様度(Shannon-Wienerの情報量示数、 $H'$ )について分析し、論議した。

なお、タイトルを含め、本論文でもちいているカラ類というのは学術用語ではなく、正確にはシジュウカラ科およびエナガ科と書くべきであろうが、一般にシジュウカラ科、エ

ナガ科の鳥を総称してカラ類と呼ぶ習慣が定着しているので、ここではあえてそのままもちいた。

## 結 果

### 1. 定点観察

定点調査ではカイツブリ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、クロサギ、アオサギ、マガモ、コガモ、トビ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサ、ゴジュケイ、クイナ、ヒクイナ、バン、イソシギ、ウミネコ、セグロカモメ、キジバト、アオバト、ホトトギス、ハリオアマツバメ、アマツバメ、カワセミ、コゲラ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、メボソムシクイ、セッカ、メジロ、ホオジロ、アオジ、ミヤマホオジロ、カワラヒワ、スズメ、シメ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの49種の鳥が確認された。調査した10か所の定点の鳥相の特徴について簡単に述べる。

百合が岳：展望台から種々の鳥を観察することができた。冬にはこの頂上付近にハシブトガラスの群れがすみついているらしく、3月、11月とも多くのハシブトガラスをみかけた。5月にはハリオアマツバメ、ハヤブサ、メボソムシクイなど、渡り途中の鳥を観察することができた。11月にはハイタカ1羽が出現し、ハシブトガラスに追われているのを観察した。

吹切：冬にはコガモが沢山飛来して、羽を休めていた。5月の調査でバンとカイツブリの生息が認められたので、この2種は繁殖しているようである。ゴイサギは3月にはいなかったが、5月、11月にかなりの数の個体が休息していた。ガマの湿地は夜行性のかげらのねぐらとして使われているようである。海岸に近い畑や竹藪には、モズやホオジロが生息していた。

間瀬：コサギやハクセキレイ、ビンズイ、イソヒヨドリが池端で採食していた。ホオジロハクセキレイ1羽をみたのもここであった。3月にはここから百合が岳の西端の崖付近を2羽のノスリが帆翔しているのを観察することができた。

大釜：5月に調査したときには鳥の種類数は多くなかったが、イソヒヨドリがなわばりを持ち、雄が2羽さえずっていた。

始の浜：各月ともトビ、コサギ、ハシボソガラス、イソシギなどが、干潟で採食しているのが観察された。水門内側の干潟ではハクセキレイやコサギが採食していた。

田浦：ホオジロハクセキレイやイソシギが干潟で採食し、3月には海へ向かって飛翔していくアオバトを1羽のオオタカ(幼鳥)が追跡しているのを観察した。

長谷川ダム：3月にはダム湖にマガモの群れが休息していた。湖面はおそらく冬は種々のカモ類の休息場所になっていると思われる。またフナが水面近くに群れており、アオサギやゴイサギはここを採食場に行っているようだった。カワセミは3月につがいのと思われるペアが観察され、求愛行動もみられたので繁殖していると思われるが、5月、11月にはみられなかった。

大島漁港：水門の内側の干潟はハクセキレイ、ゴイサギ、イソヒヨドリなどにとってよい採食場になっている。港の上空にはトビが多かった。小学校脇の水路ではよくキセキレイをみかけた。3月には漁船にウミネコがついているのを岸壁から観察した。

表1. 長崎大島で確認された鳥 (1990年3月, 5月, 11月).  
Table 1. Bird species recorded in Ohshima.

和名 Japanese name	学名 Scientific name	出現月		
		March	May	November
カイツブリ	<i>Podiceps ruficollis</i>		+	
ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	++	++	++
ダイサギ	<i>Egretta alba</i>	+		
コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	+		+
クロサギ	<i>Egretta sacra</i>			+
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>			+
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	++		
カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>			+
コガモ	<i>Anas crecca</i>	++		++
ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>			+
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>			+
トビ	<i>Milvus migrans</i>	++	++	++
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>		+	
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>			+
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	+		+
ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	+		
コジュケイ	<i>Bumbusicola thoracica</i>	+	+	
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>			+
ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>		+	
バン	<i>Gallinula chloropus</i>		+	
イソシギ	<i>Tringa hypoleucos</i>	+	+	
セグロカモメ	<i>Larus argentatus</i>	+		
ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	+		+
アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	+	+	+
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	++	++	++
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>		+	
ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>		+	
アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>		+	
カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	+		
コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	++	++	++
ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	+	++	
キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	+		+
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	++		++
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>			+
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	+++	+++	+++
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	+	+	++
ジョウビクキ	<i>Phoenicurus amaurotis</i>	+		+
イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	++	++	++
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	++		++
ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	+		
ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	+++	+++	++
ククイタダキ	<i>Regulus regulus</i>			+
メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>		+	
セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>		++	
メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	+++	+++	+++
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	++	++	++
ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	+		+
アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	++		++
クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	+		+
カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	++	++	++
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>			+
イカル	<i>Eophona personata</i>		+	
スズメ	<i>Passer montanus</i>	++	++	++
ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	++	++	++
ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	+++	++	++

記号説明: +……少ない, ++……普通, +++……多い

寺島（屋敷鼻）：海岸からカモメ類が観察できたが、ウミネコが多く、セグロカモメはごく少なかった。11月にはクロサギを観察することができた。近くの崖の上で営巣しているものと思われる。

寺島（大浦）：5月にはヒクイナをみることができた。少なくとも3羽はいるようで、2羽が争うところもみられた。11月には同じ場所でクイナの声聞いた。

## 2. ラインセンサス

ラインセンサスで記録された鳥の種数は3月21種、5月19種、11月20種とほとんどかわらなかったが（図2 A）、種の多様度（ $H'$ ）は5月が若干低かった（図2 C）。個体数は3月の192羽（8.53羽/ha）と11月の198羽（8.80羽/ha）に比べると、5月は少なく、151羽（6.71羽/ha）であった（図2 B）。これは繁殖している夏鳥が少なく、冬鳥が多いためである。定点調査で記録されず、このセンサスで出現したのはキクイタダキ、クロジ、イカルの3種であった。各コースの鳥類の出現状況について述べる。

### a) 馬垣跡～太田尾コース

観察できた種数と個体数は3月13種76羽、5月11種38羽、11月13種25羽ではかの2ルートよりも種数は少なかった（図2 A）。3、5、11月の鳥の密度はそれぞれ10.86、5.42、3.57羽/haで、3月を除いて3コース中、密度はもっとも低かった（図2 B）。冬の方が若干種数が多いのは、初夏にはセッカとホトトギスが記録されてはいるものの、冬にはジョウビタキ、シロハラ、アオジ、ミヤマホオジロの冬鳥が記録されているからである。また3月の個体数が非常に多いのは、ホオジロとカラヒワの越冬群が出現したことによって

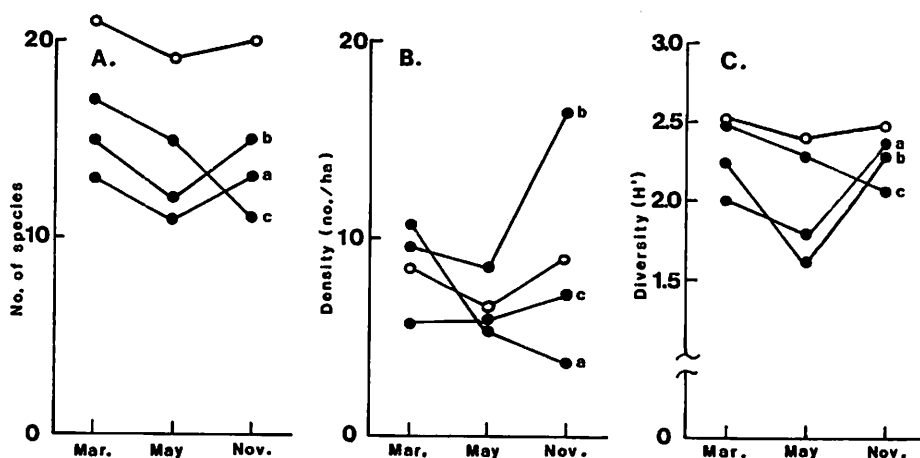


図2. 3本のセンサスコースにおける (A) 種数, (B) 密度, (C) 多様度の季節による比較. a) 馬垣跡～太田尾コース, b) 横尾峠～塩田漁港コース, c) 内浦～大島コース. 白丸は各月の合計 (または平均).

Fig. 2. No. of species recorded (A), density (B), and diversity (C) of three census courses : a) Magaki-ato to Ohdao, b) Yokoo-toge to Shiota harbour, and c) Uchiura to Ohshima. Open circle shows sum or average.

いる。種の多様度は5月に大きく落ちこんだ(図2C)。畑の周囲にはススキが多く、セッカやホオジロが営巣していると思われる。

#### b) 横尾峠～塩田漁港コース

観察できた種数と個体数(密度)は3月15種56羽(9.33羽/ha)、5月12種52羽(8.67羽/ha)、11月15種98羽で(16.33羽/ha)、3月と11月にはジョウビタキ、シロハラ、アオジ、ミヤマホオジロ、イカルなどの冬鳥が多く記録されているのが種数が多い理由である(図2A)。11月の密度が高いのはメジロ、ヒヨドリ、ウグイスが多く記録された結果である(図2B)。巣立った若鳥に加えて、越冬個体が多く含まれているのかもしれない。種の多様度は前コースと同じく、5月に落ちこんでいる(図2C)。

#### c) 内浦～大島コース

観察できた種数と個体数(密度)は3月17種60羽(5.71羽/ha)、5月15種61羽(5.81羽/ha)、11月11種75羽(7.14羽/ha)が記録された(図2A、B)。他の2コースと異なり、3月がもっとも多く、11月がもっとも少なかったが、密度ではそう大きな差はなかった。3月にはジョウビタキ、シロハラ、キクイタダキ、アオジ、クロジ、ミヤマホオジロ、イカルなどの冬鳥が記録された。峠の手前のスギ林では、3月、11月ともクロジの小群が生息していた。5月の調査では大島漁港に近い、山すその農耕地付近のごくせまい範囲でモズが6羽記録された。一般にモズの繁殖期とされる3月には、このコースでまったく記録されなかったことから、これらの個体は渡りの個体かもしれない。種の多様度は他の2コースと異なり、11月に大きく低下した(図2C)。

定点調査で出現した49種、センサスによる追加の3種に加えて、1990年11月16日に牛が首鼻から吹切を結ぶ海岸線ぞいの道路から海上にウミアイサ、カルガモ、ミサゴを確認した。これらの合計55種が、今回の調査で記録された鳥である(表1)。

## 論 議

記録された55種のうち、一年中大島にとどまり、繁殖していると考えられるものは、カイツブリ、クロサギ、トビ、ミサゴ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、キセキレイ、ヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの18種。夏鳥はヒクイナ、バン、ホトトギス、ツバメ、セッカの5種。冬鳥と考えられるものはアオサギ、ゴイサギ、コサギ、マガモ、コガモ、カルガモ、ウミアイサ、ミサゴ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、クイナ、ウミネコ、セグロカモメ、アオバト、ハクセキレイ、ビンズイ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、キクイタダキ、クロジ、アオジ、ミヤマホオジロ、シメ、イカルの26種。春と秋の渡りの時期に出現すると考えられるものはダイサギ、ハヤブサ、イソシギ、ハリオアマツバメ、アマツバメ、メボソムシクイの6種であった。

冬に越冬するホオジロ属の鳥類について、ミヤマホオジロが多いことに九州地方の特徴がよく現れている。一方、関東や関西に多いカシラダカは今回の調査を通じて1度も観察できなかった。ホオジロ属では比較的数の少ないクロジの小群が生息していたことが特筆できる。これらのことは日本で越冬するホオジロ属鳥類の地域による種構成の違いを表し

ていて興味深い。

大島の鳥相は自然林が発達していないこともあって、留鳥または夏鳥として島内で繁殖する鳥は多くない。しかし渡り鳥や冬鳥は、島の地理的位置からして、かなり豊富に観察でき、今後とも調査が進めば記録種数は増えていくだろうと思われる。

大島に勤務先を持つ植村昌宏氏は、1988年からの3年間に74種の鳥を記録している（植村昌宏 私信）。今回の調査で出現して植村氏の記録にないものはカイツブリ、ウミアイサ、オオタカ、クイナ、セグロカモメ、キクイタダキ、クロジ、シメの8種、また植村氏の記録にあって、今回の調査で記録できなかったものはウミウ、ハチクマ、オジロワシ、アカハラダカ、サシバ、チョウゲンボウ、キジ、ナベヅル、マナヅル、キョウジョシギ、ハマシギ、ソリハシシギ、チュウシャクシギ、カモメ、オオセグロカモメ、コアジサシ、カッコウ、ヒメアマツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、セグロセキレイ、キレンジャク、ヒレンジャク、ルリビタキ、ノビタキ、ヤブサメ、エゾビタキ、ウソ、ムクドリとの29種であった。

ナベヅルとマナヅルについては、千羽・安部（1990）に大島町で1989年2月27日に150羽のツル類（種不明）が15分間ほど旋回のものち平戸方面へ飛去したという記録があり、今回の共同調査者の山口裕文氏も吹切の湿地に降りているツル類を観察している。さらに多くの町民からの情報でもツル類が通過することは確実である。ハチクマ、アカハラダカ、サシバ、カッコウ、ヒメアマツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、ノビタキ、ヤブサメ、エゾビタキについても渡りの時期と今回の調査時期にはズレがあったため、記録できなかったものと思われる。アカハラダカは近年、九州地方を経て朝鮮半島へ渡る渡りのコースが発見され、平戸や佐世保の上空を通過する群れが観察されているので（池長 1991, 鴨川 1992）、大島でも渡りの季節には多くのアカハラダカが通過していくものと思われる。

大島の鳥相で特筆すべきことは、カラ類がいないということである。長崎県下でも、佐世保（鴨川 1984）や北松浦半島（鴨川 1979）、平戸島（鴨川 1970）にはヤマガラ、シジュウカラ、エナガはごく普通に生息している。しかし今回の各シーズン、3回にわたる調査では夏も冬もカラ類はまったく観察されなかった。また植村氏の記録にもカラ類はまったく登場しない。現在、大島ではカラ類は繁殖しないことはもちろん、冬期にも生息しないと思われる。大島は200m離れた寺島を経て、さらに900m離れた西彼杵半島とは目と鼻の先である。カラ類がこの距離を移動できないとは考えられない。

大島は江戸時代中期に大村藩の牧場がまず太田尾につくられ、以降、寺島も含め、田浦、徳万、塔尾、馬込などにも牧場があった。これらの牧場は江戸時代の終わりまで続いていた（大島町郷土研究会 1983）。これらすべてをあわせると島のかかなりの面積が放牧場になっていたことがうかがわれる。この時期、わずかに残った周囲の山林は薪炭林として伐採されていたであろうから、自然林として残されていた面積はほとんどなかった。さらに1960年代まで西彼杵炭田大島炭坑として栄えた時代に、二次林として復活した林を抗木として、また薪炭用に切りだしたために、大島ではここ数百年にわたって、カラ類が営巣できるような自然の樹洞を持った照葉樹林が発達する間がなかったものと思われる。大島にシジュウカラやヤマガラが生息しないのは、この歴史的事情が大きく関わっているものと思われる。

いまのところ、百合が岳のシイの林に代表されるように、島の林はほとんどが年齢の若

い二次林で、ヤマガラやシジュウカラの営巣に適した樹洞を持つ木は皆無であるが、樹洞営巣性でないエナガにとっては、林が若齢林であっても繁殖にはさしつかえない。また現在は山林そのものを利用してはいないので、スダジイなどもかなり成長してきている。もう少しこのまま林が放置されれば、大島の原植生である照葉樹林が回復し、カラ類も定着すると同時に、夏鳥や留鳥の種数も増えていくものと思われる。

終わりに、調査にあたって現地での案内から文献入手までお世話になった大島町教育委員会の和唐雄刀志さん、この調査の機会を与えていただいた大阪府大農学部遺伝育種学研究室の山口裕文さん、大島で記録された鳥のデータをみせていただいた日本野鳥の会長崎県支部の植村昌宏さんに心からお礼を申し上げます。

### 要 約

著者は長崎大島（長崎県西彼杵郡）に生息する鳥類相を明らかにするために、1990年に3回、大島をおとずれ、定点観察とラインセンサスによる調査を行なった。その結果、定点観察で出現した49種、センサスによる追加の3種に加えて、さらにこれら以外に3種の、計55種の鳥が記録された。記録された55種のうち、留鳥は18種、夏鳥は5種、冬鳥は26種、春と秋の渡りの時期に出現すると考えられるものは6種であった。大島は自然林が発達していないこともあって、夏鳥は少ないが渡り鳥や冬鳥は多く、島の地理的位置からして、かなり豊富に観察でき、今後とも調査が進めば記録種数は増えていくだろうと思われた。大島の鳥相で特筆すべきことは、カラ類がないということである。かれらが分布しないのは、江戸時代における放牧場の設置と近代に入ってから炭坑開発によって、長期間、森林が発達していなかったという歴史的事情によるものと思われる。

### 引用文献

- 千羽晋示・安部直哉. 1990. 鹿児島県出水水平野におけるツル類の基礎調査. 第23報, pp. 6.  
池長裕史. 1991. 見に行こう! アカハラダカの渡り. *Birder* 5 (10): 30-35.  
鴨川誠. 1970. 平戸島の鳥類 1. くろこ (平戸島生物研究会) 1: 22-38.  
鴨川誠. 1979. 北松浦半島の鳥類. 長崎県北松浦郡北部・佐賀県東松浦郡の哺乳類と鳥類の生息状況調査報告書 (西日本技術開発株式会社), pp. 35-53.  
鴨川誠. 1984. 佐世保の鳥類. 『南窓』(長崎県立佐世保南高等学校) 28号, pp. 49.  
鴨川誠. 1992. 天を舞う鷹の群れ — アカハラダカの渡りルートをさぐる —. *アニマ* (241): 88-90.  
大島町郷土研究会. 1983. 大村藩主二十一代純信公御領馬 — 大島町牧場之歴史 —.

Birds of Ohshima in Nagasaki Prefecture, Kyushu.

Keisuke Ueda<sup>1</sup>

I made bird counts in Ohshima Island, Nagasaki Prefecture, in March, May and November, 1990. Of 55 species recorded, 20 were residents, five were summer visitors, 24 were winter visitors, and 6 were transients. A unique characteristic of the avifauna was



lack of tits. This may be ascribed to the history of pasture and coal mining in the island.

1. Lab. of Biology, Rikkyo University, Nishi-Ikebukuro 3, Tokyo 171.